

野口彌太郎没後50年

野口彌太郎

—長崎を描いた画家たち—

2026.1.30.FRI ▶▶▶ 5.31.SUN



「長崎の情緒」油彩，1966

私は石畳の片隅に画架を立て、前景の古びた商館の屋根を越して、ギラギラ黄色にかがやく海面を写生していた。対岸と連絡する椀をふせた様な汽船が行来している。稲佐山は暗くしずんで湾をかこんだ山々が、ギザギザに浮き彫りに見える。夕景の光は金色に照り、まっ赤な雲が走ってきた。

〔野口彌太郎／“長崎を愛す”昭和32年『造形』1・2月号長崎の今昔特集より〕

旧長崎英国領事館2階 野口彌太郎記念美術館

- 【施設名】 旧長崎英国領事館／野口彌太郎記念美術館
- 【開館時間】 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 【休館日】 月曜日(祝日をのぞく)
- 【入館料】 一般700円，小中高生350円 *旧長崎英国領事館と共通
- 【所在地】 長崎市大浦町1番37号
- 【問合せ先】 095-821-3205

煉瓦造の
洋館です♪



野口彌太郎—長崎を描いた画家たち—

戦前、長崎市は要塞地帯法により、要塞司令部の許可なしに風景画も描けない状況に置かれていましたが、終戦により自由を取り戻します。中央画壇の画家たちは、東西文化が融合した独特の情趣に惹かれて長崎を訪れました。そのなかで大きな影響を与えた画家の一人が、独立美術協会の野口彌太郎（洋画家）でした。野口は、戦後間もない昭和22年（1947）長崎を訪れ、翌年には山本正と二人展を開催、その後も長崎の地で多数の作品を描きました。

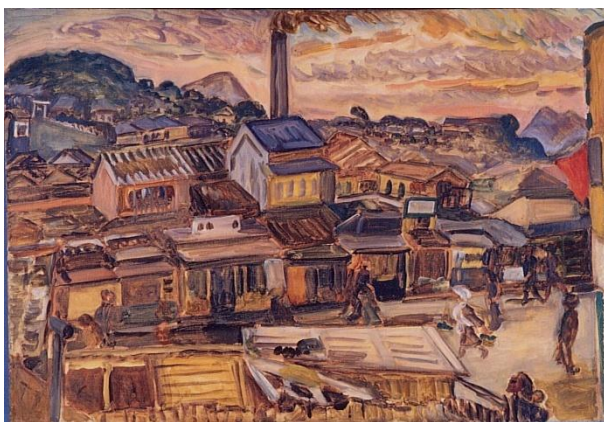
野口が描く長崎は、洋館や斜面地に連なる家々、石畳の道を往来する人々といった、古くからの異国情緒のなかにある街や人々の息遣いといったものに目が向けられています。また、夕暮れ時、山々に囲まれた長崎港に夕陽が輝き、一刻一刻と表情を変える夕焼け空の美しさに夢中で絵を描いたと言います。野口彌太郎の没後50年を迎える今年、野口彌太郎が愛した長崎の地に着目し、特に訪れるたびに通った旧居留地を中心としたエリアや長崎港を題材にした作品を展示します。加えて、野口と同様に長崎の景色と風土に魅せられたと言い、長崎を題材にした作品を遺した同時代の画家たちや地元長崎の眼で画を制作した長崎市出身の作家の作品をご紹介します。ぜひ、昭和時代の長崎の風を感じる作品をご覧ください。



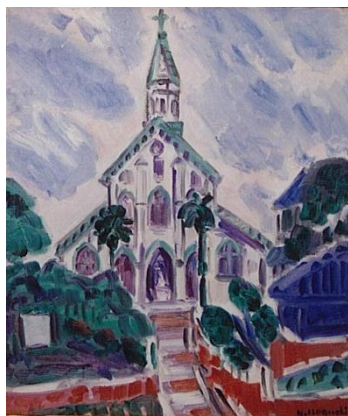
野口彌太郎（1899～1976）

日本的なフォーヴィズムの画風を確立した洋画家。独立美術協会所属。1973年『那智の滝』芸術選奨文部大臣賞（美術部門）受賞。

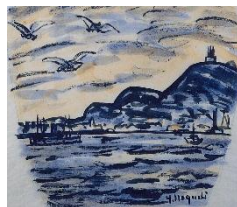
長崎とのかかわりは、12歳の時、父の郷里であった長崎県北高来郡小野村（現・長崎県諫早市小野町）に転入したことがきっかけでしたが、特に、戦後、両親が郷里の諫早市に転居したことで、たびたび長崎を訪れるようになります。幾度も長崎を訪れ、時に数か月も滞在し、立体的な景色を形づくる斜面地や逆光にくすむ夕暮れの長崎の風景を描くなかで、独特の鮮やかな色調を見出したといわれています。



1.



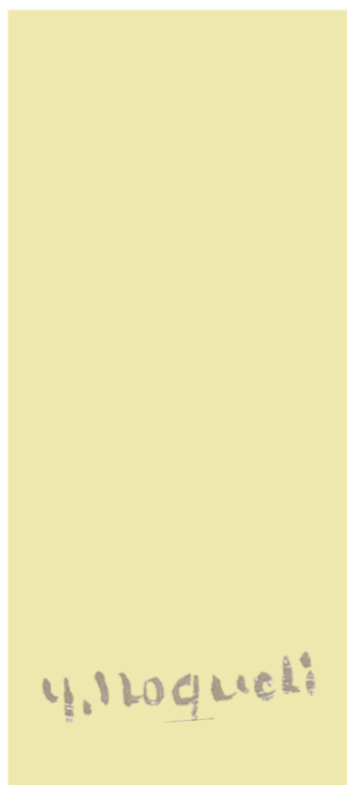
2.



3.



4.



1. 長崎の夕ぐれ, 1950, 油彩, 50号P
2. 大浦天主堂, 1970, 油彩, 10号F
3. 稲佐山夕景, 不詳, 墨彩, 3号相当
4. 南山手の洋館, 不詳, 水彩, 6号相当



旧長崎英国領事館

THE FORMER BRITISH CONSULATE in Nagasaki

長崎市大浦町1番37号 TEL.095-821-3205

アクセス

- 路面電車：「大浦海岸通り」下車徒歩3分
 - バス：「メディカルセンター」下車徒歩2分
- * 専用駐車場はありませんので、公共交通機関をご利用ください。



明治期の洋館の室内で展示

洋館と作品をお楽しみください

*美術館内の撮影は著作権保護のためご遠慮ください